

コミュニティ・スクール検討委員会 議事録（第4回検討委員会）

◆日 時 平成31年3月13日（水）午前10時00分から

◆場 所 本庁舎 2階 第2委員会室

◆出席委員

氏 名	現 職 等	備 考
水谷 修	東北学院大学 教養学部長	委員長
梨本 雄太郎	宮城教育大学教職大学院 教授	副委員長
大内 ユカリ	仙台市立幸町中学校 P T A会長	
亀倉 靖宏	仙台市立上杉山中学校 校長	欠席
今野 孝一	仙台市立上杉山通小学校 校長	
島田 福男	仙台市連合町内会長会 副会長	
千田 初男	愛子の森ハグリッズ 運営委員長	
山川 由紀子	西中田小学校学校支援地域本部 西中田こみこみスクール スーパーバイザー	
山口 裕子	仙台市立沖野小学校 P T A会長	
横山 倫子	高森中学校区学校支援地域本部 スーパーバイザー	欠席

◆配付資料

座席表

次第

資料1 東山田中学校ブロック学校運営協議会視察 報告

資料2 第1～3回コミュニティ・スクール検討委員会より

参考資料 「コミュニティ・スクールとしての東山田中学校」

「横浜市立東山田中学校ブロック 第4回学校運営協議会」

◆会議概要

1 開 会

2 議 事

（1）「東山田中学校区ブロック学校運営協議視察の報告」

① 視察概要の報告

- ・事務局から資料1に基づき説明。
- ・学校運営協議会の協議の様子について、視察の際の記録動画を視聴

② 参加委員からの報告 視察所感（参考となる点、気付き等）

水谷委員長：学校運営協議会の委員になっている弁護士の方は地域住民なのか。委員にこのような方を加えることは、制度上求められているのか。

事務局：地域住民なのかは確認していない。キャリア教育の講師なども依頼しているので、遠くから呼んでいる委員ではないと思われる。地域の情報ネットワークから候補者を見つけている。

水谷委員長：視察に参加した委員から感想も含めて報告をお願いしたい。

島田委員：感じたことは、学校運営協議会は仙台の学校関係者評価委員会や健全育成協議会に似ている。私の中学校区では、小学校3校と中学校で健全育成協議会を組織しているが、これと似ていると感

じた。異なっている点は、仙台市では、司会や説明を学校側が行い、参加の方々はそれに質問をしているが、学校運営協議会は地域が進行し、自由に意見が言える雰囲気であり、場作りがされている。また、学校運営協議会は、健全育成協議会よりも中身が濃く、進化していると感じた。特に違う点は、学校評価委員会などに行くと、学校の三役と会話するのがほとんどであるが、東山田の学校運営協議会では、一般の教職員や生徒会との懇談会ができることである。また、会議で大事なことは、意見を自由に述べられる委員の人選が大事と考える。いろいろな立場の人が入っていて、意見が言いやすいことが大事だと考える。

水谷委員長：学校運営協議会の人選は具体的にどのように進めているのか。

事務局：最初は宛て職だったが、コミュニティハウスに人材情報が人づて、地域のネットワークで集まってくるとのことである。委員候補となる方はすぐに委員に加えるのではなく、キャリア教育の講師などで学校の活動に関わってもらい、その様子を見て、人柄や建設的な意見が言えるかどうかなどの視点から人選しているとのことである。

水谷委員長：人選の権限は誰にあるのか。

事務局：人選の権限については、直接確認はしていないが、制度的には、学校長が推薦し教育委員会が委嘱していると考ええる。

水谷委員長：人選は学校運営協議会の合意を得て、委員候補を決定しているのか。

島田委員：自分も同じ部分に疑問を持った。誰が人選し、任命するのかが一番問題になると思う。始めは充て職で行っていて、それではうまくいかないということで、校長が推薦して、学校運営協議会で選任する形を取っているのではないかと思った。

山川委員：人選については、誰が見定めるかが問題である。東山田中学校ブロック学校運営協議会の中心は竹原さんであると感じている。誰の思いで人選を進めるかになるが、あれだけのメンバーをあつめるのは、学校長では難しいと思う。視察の印象として、まず、環境がすばらしいと感じた。コミュニティハウスは地域の人が集える場所である。活動そのものについては、仙台とそれほど違いはない。学校と地域の間で、しっかり協議されており、会議の雰囲気が大事であると感じた。本市としては地域教育協議会の人選をスライドすることや新しい会議を立ち上げることも考えられるが、学校地域支援本部を下支えするものであるべきと考えている。また、委員になっている学識関係の方の発言が、適切で、質の高いと感じてきた。

水谷委員長：コミュニティハウスは、学校とは独立した施設なのか。

事務局：学校内にある施設だが、セキュリティは別で自由に鍵を開けて使え、館長もいる。学校運営協議会では、委員が質の高い発言をしている。建設的で、学校に進言していた。これまでの組織を発展させるか、全く新しくするか、学校運営協議会の人選や場作りが大事であると感じている。

山川委員：学校評議員会では、支援本部は学校と近い関係になってしまうので、第三者として言いにくくなると感じている。

水谷委員長：自分が参加している学校評議員会（古川、仙台の高校）では、利害関係がなく、学校へ意見を言える立場で参加できている。

梨本副委員長：意見交換できていることが大事である。メンバーの見つけ方、育て方も大事だが、会議以外の日常的な活動の中で、頻りに意見交換ができる関係、人と人とのつながりはそのようなことができる拠点、場所があることが重要であろうと思う。

梨本副委員長：運営予算はそのように確保しているのか疑問である。

事務局：学校運営協議会委員には、既定の年間報酬はあるが、実際の活動は実質的にボランティアである。学校運営協議会の活動については、会計報告をしているので、独自の予算を確保していると思われる。他に地域学校協働本部の予算を活用しているとのこと。

梨本副委員長：コミュニティハウスの設備予算はどのくらいあるのか。

事務局：学校と設備一体型であり、中学校の中にコミュニティハウスの施設がつくられている。休日でも活用できるように中学校との間に仕切りがつくられている。

梨本副委員長：コミュニティハウスはコミセンが校内にあるようなものなのか。

事務局：誰でも入れるが、目的ははっきりしており、講座も行っている。本市のマイスクールに近いと考えている。コミュニティハウスには館長、職員がいる。

梨本副委員長：仙台にはそのような形はないと思う。横浜に公民館がないのではないかと。公民館がないから施設を作っているのではないかと。

事務局：社会教育施設の機能を持たせているようである。うまく行っていないところもたくさんあるようである。たくさんあるので、行政で把握しきれていないようである。

梨本福委員長：資金が必要となった時、単独で経済活動をしているのか。

事務局：経済活動は行っていない。予算については、調査する必要がある。

(2) 「本市でのコミュニティ・スクールの導入について」

山川委員：コミュニティ・スクールは、モデル校止まりで考えているのか。全市で実施すると考えているのか。仙台市として、どの程度の覚悟で進めるのかを伺う。仙台市では、学校支援地域本部が広がっている。今後、コミュニティ・スクールを実施する場合、設置されている地域から導入を進めていくことになるのか。

事務局：スケジュールは、委員会の提言を基に要検討する。国から努力義務として示されているので、将来的には全校での設置を検討するが、まずはモデル校での実施・検証からはじめていきたいと考えている。

水谷委員長：さらに踏み込んだ制度を作っていく必要性はあるのか。

事務局：これまでの検討委員会の意見から、資料2-1の「2 本市での関連事業について」のような要素を取り入れることなど、仙台市版での可能性を感じる。子供が参画していく仕組みにも魅力を感じている。

水谷委員長：委員以外の考えとして、データはないか。

事務局：学校支援地域本部の意見から、活動内容として、「学校の求めに応じているだけでいいか」「子供たちに必要かどうか」という考えがある。課題として、支援本部の活動を継続的に実施したいが、学校の人事異動等により、方針が変わることがある。また、スーパーバイザーの後継者の育成の問題もある。一歩踏み込むものとして、コミュニティ・スクールの制度を導入することが有効であると考えている。

今野委員：支援本部もPTA本部も学校経営について共有する場だと考えるが、コミュニティ・スクールについては、仙台市として必要かどうか、明確なビジョンが必要である。コミュニティ・スクールのやり方は地域の特性に合わせていろいろあるので、仙台市が持っているものを活かし、再構成

していく、設計図が必要である。

梨本副委員長：校長の考えも大事だと考える。学校の案件で、難しい判断、重要な決断が迫られるとき、そのプロセスで、相談役として、学校外部からの意見を踏まえる必要があるかどうか検討が必要である。

今野委員：コミュニティ・スクールは、個人的にはいいと思う。頼りになる組織になる。中学・高校はどうかを訊く必要もある。

千田委員：コミュニティ・スクールの将来性や可能性に期待している。一般の住民にとって、学校は入りにくいところ、理解しにくいところである。地域の小学校では、あいさつ運動などを行い、あいさつができる子供を育てようとしているが、地域の大人がそれに応じているかどうか疑問が残る。子供たちと地域住民があいさつしあえる地域にしたいと考えている。また、地域が都市化してきており、住民間はコミュニケーションが薄くなってきている。住民同士がコミュニケーションできる地域になってほしい。学校には、校内にコミュニティスペースがほしいと働きかけている。ミニコミュニティ・スペースを作り、自由に過ごし、会話ができる、気軽に行ける場が学校にほしい。そのような形（場）があると、地域の人にとって学校が近い存在になり、進んでいくと思う。

山川委員：私は学校支援地域本部のスーパーバイザーを行っているが、地域の方や保護者から、学校に一日中いると思われているので、突然訪ねてくる人がいる。学校にふらっと入れる場所があるのがいいと思う。地域には、子供たちの事を自分の地域の子だと思っていたり、守ってやりたいと思っている人がいる。低学年のうちから親が働きに出て、誰が子育てをするのかという時代である。いろいろな人が関わると、子供は安心して学校にいたることができる。多くの人の目で見守れる場が学校にあるといいと感じている。課題は、学校が支援を受け身の姿勢で受けていることである。コミュニティ・スクールでは、地域の意見を正面から受け止められればと思う。私としても、コミュニティ・スクール期待は大きい。

島田委員：自分の子供が就学児だった時は、学校の担任の先生とよく話できたが、今は話す相手が管理職である。コミュニティ・スクールについて、教諭の理解も必要である。震災時、避難所に行政や学校職員が担っていた時、当然受けられる対応だからと、住民からは不平・不満が出ていたことがあった。しかし、そこに地域の人が入ると、同じ被災者として文句が出ないと感じる。学校には、もっと地域の力が入るといいと考えている。問題は人選や場作りである。そのためにはお金もかかることがある。

島田委員：マイスクールは継続しているのか。

事務局：空き教室の活用からスタートし、市内小学校8校にて実施している。地域のコーディネーターが在籍している。学習サークルや子供対象事業を行っていて、小さな市民センターがあるようなものである。

山口委員：一般の方へ浸透させる必要があると感じている。関わることへのメリット（子供にも、大人にも）を伝えていくことが大切である。

大内委員：場所の確保が必要である。PTA室など、学校の施設を活用していくのがいいのではないかなと思う。管理職以外の職員や子供とのかかわりが持てると良い。

水谷委員：地域づくりにコミュニティ・スクールの考え方に活かし、何を大事にするか、理念づくりをしっかりと練る過程が必要である。地域で何を大事にしていくのか、調査する必要がある。そんな助

走作りができるのではないかと考える。

千田委員：私の地域の学校支援地域本部は、スタートから本部のトップは地域だった。町内会長が代表。実績も作り、誰（校長）が来てもやめられないようになっている。森の整備から始まり、講師を呼んで講座を開くようになり、学校でもどのように活用するか考え、総合のカリキュラムに取り込んでいった。

山川委員：こみこみスクールは、地域の活動に、学校を使わせてもらうことにした。地域の活動として、子供のためにも活動している。

梨本委員：地域は学力には口出ししにくいですが、地域とのかかわりは、大人になってから必要なことや大事なことを学ぶことができる。子供たちは体験が意欲となり、いろいろな関わりをもち、いろいろな考えを知ることが学習意欲、表現力の高まりにつながり、他者の意見を受け入れることが学力につながると考える。地域に開かれた学校となる。

(3) その他

3 事務連絡

第5回コミュニティ・スクール検討委員会について

4 閉会

この議事録について、会議の内容と相違ないことを認める。

令和元 年 7 月 8 日

コミュニティ・スクール検討委員会

署名委員

島田福男

